

第12回 日本小児理学療法学会 学術大会 in 愛知

ワークショップ抄録集

会 期

2025年**12月21日** ①13:00~13:30 / ②14:00~14:50

会 場

愛知淑徳大学 星が丘キャンパス 4号館

事前申込のご案内

本学術大会では、ワークショップへの事前申し込みを受け付けております。
詳しくは大会公式サイトをご確認ください。
皆様からのお申し込みを心よりお待ちしております。



ワークショップ 12月21日(日)13:00~13:50

ワークショップ① 第6会場(4号館1階41B教室)

企画者 中島 愛(赤羽クリニック)

希望定員:なし

呼吸器ユーザーの僕の Fun あふれた Future

※話題提供者として当事者様ご家族様の参加予定

「埼玉在住 人工呼吸器ユーザーの20歳の僕。

この僕が将来、どんなに楽しい生活を送れるか。一緒に考えてくれませんか？」

小学1年で人工呼吸器ユーザーとなった僕は、ずっと母がそばにいる。学校にもついてきた。遠足も修学旅行も一緒。看護師か母がいないとどこにも行けないし一人になる事も出来ない。

色々制度は出来ているけどほとんどが使えない。「人工呼吸器ユーザーまで受け入れる余裕がない」と断られることばかり。母がいなくても、僕は学び、余暇を楽しむ権利を行使したい。

そこで、僕は考えた。毎日、何をして過ごせばいい？ 休日はどうしよう？ 何をして稼いだらいい？ どこに住めばいい？ どんな家に住めば、楽しく暮らせるだろう。いっそ村をつくろうか。

仲間と刺激を受けあい、与え合い、学び、成長を続けられる生活。僕にとっての Fun な Future ってどんなだろう。みなさん、一緒に考えてくれませんか？

ワークショップ② 第7会場(4号館1階41C教室)

企画者 北村 貴郁(株式会社 Loving Look こども訪問看護 ST じん おかざき)

希望定員:20人

ぼくたちの未来

※話題提供者として当事者様ご家族様の参加予定

“障害者”・“健常者”という言葉、我々医療職はよく用いますが、当たり前にするこの言葉たちの間に、壁を感じたことはありませんでしょうか？ 私たちは障害者・健常者問わず、当たり前のように日々の臨床の中で接しています。一方で、障害者に対する社会的な理解・受け入れが進んでいると、直接的に実感することは少ないのではと思います。

本企画では、当事者である S さんの生い立ちや現在の活動をお話いただき「社会に対して理学療法士がどのように関われるか」「当事者の話を伺って感じたこと」などを共有し、今後の臨床における関わり方・考え方を振り返る機会になることを期待します。また、異なる価値観や視点を共有する中で、新たな発見や臨床への実践につながることを目的としています。

ワークショップ③ 第8会場（4号館1階41F教室）

企画者 多田 智美（鈴鹿医療科学大学）

希望定員：40人

F-Wordsの実践～通所支援施設・放課後等ディサービスへの導入の試み～

カナダの CanChild・Rosembaum 教授らが提唱した「F-Words」は、WHO（世界保健機構）の国際機能分類（ICF）の枠組みをお子さんの生活の重要な6つの要素に落とし込んで2011年に提唱されました。その後日本に紹介されてセラピストの間では急速に広まり、現在はお子さんの障害像の把握にも使われるようになりました。しかし CanChild では、F-Words は、保護者や当事者とともに作成し、お子さんとご家族の生活、関心事、楽しみ、未来への期待を共に知ること、生活の改善につながるサービスの提供を考えていることを提唱しています。今回は初めて F-Words を保護者から聞き取りながら、ご家族とお子さんの生活について理解を深めた重症心身障碍児児童発達支援・放課後などディサービス事業所の取り組みを報告し、F-Words について今一度考えたい。

ワークショップ④ 第9会場（4号館2階42C教室）

企画者 小島 賢司（運動教室 FunFun／横浜療育センター港南）

希望定員：50人

運動教室で行われる自由遊びをナラティブ的解釈で紐解く

私は横浜市内の2か所の幼稚園で自由遊びを提供する運動教室を開催しています。そこでは子どもたちは活動を通して自分の新しい一面を発見する場となっています。また、保護者は子どもの発達の悩みを打ち明けたり、子どもに対する認識に変化をもたらしていくことを目的としています。そのために私たち理学療法士は、子ども主体の活動の様子から心の動きを読み取り、本人が心身共に挑戦しやすい環境調節を行っています。活動は身体性だけでなく行動から心理的な状態を読み取るスキル、行動から発達段階を推測するスキルがとても重要になっています。今回のワークショップでは、一人のお子さんの活動の文脈から本人とその周辺の人々の心の動きを読み取っていきます。今、どんなことを考えているのか、彼の為に周りの人がどんな行動をとったのか行動から心的心声を代弁していきます。みなさんの解釈を言葉にすることで他の参加者に子どもたちに対する新たな視点を提供することができます。是非、参加される皆さんの力を貸してください。

ワークショップ⑤ 第 10 会場（4 号館2 階 42D 教室）

企画者 平岡 司（西新潟中央病院）

希望定員：25 人

子どもと家族のニーズを考える-家族を中心としたケアの実践と課題

子どもへの支援内容を検討する際、理学療法士は身体機能や発達段階といった個人因子に焦点を当てることが少なくありません。しかし、子どもの発達や生活は家族との相互作用の中で形成されるものであり、子どもだけでなく家族全体をケアの中心として捉える「家族を中心としたケア（Family-Centered Care）」の視点が重要です。この実践には、家族全体の強みやニーズを把握して、家族と理学療法士が協働することが求められます。一方で、家族のニーズは変化し続けるものであり、限られた介入時間や家族自身がニーズを明確に表現することの難しさなどもあり、ニーズを把握することは容易ではありません。

本ワークショップでは、家族のニーズを把握する一つの手段である日本語版 Family Needs Survey(FNS-J)の活用事例を紹介し、他の事例への応用や、臨床で活用する上での注意点や課題について検討する機会となることを目指します。

ワークショップ⑥ 第 11 会場（4 号館2 階 42E 教室）

企画者 北村 憲一（静岡県立こども病院）

希望定員：40 人

重症心身障害の呼吸管理

本ワークショップでは、「重症心身障害児（者）の呼吸ケア」をテーマに、グループディスカッションを実施する。ワークショップの企画にあたり、小児領域に従事する理学療法士を対象としたアンケート調査を実施した。その結果、複数選択式の設問において、76%の回答者が「他施設における評価や治療の展開を知りたい」と回答しており、本分野におけるエビデンスの乏しさや臨床指針の不明瞭さが、多くの臨床家に共通する課題であることが示唆された。

当日は、代表的な呼吸評価法について解説を行った後、各評価に関して①日常的に必要とされる評価と一時的に必要となる評価、②設備を要する評価と汎用性の高い評価に分類し、グループワークを通じて整理・検討を行う。さらに、症例動画を提示し、「どの評価が必要か」「特定の評価結果に基づき、次にどの評価や治療を実施するか」といった思考プロセスを参加者間で共有する機会を設ける。

本ワークショップが、重症心身障害児（者）の呼吸ケアにつなげる評価を可視化と共有を促し、各施設の多様な視点を持ち寄ることで、臨床現場で即実践可能な手法の獲得につながることを目的とする。

ワークショップ⑦ 第12会場（4号館2階42F教室）

企画者 竹田 智之（横浜市教育委員会）

希望定員：30人

学校教育との関わり：全国実践共有リレー～様々な立場から

昨年度の日本小児理学療法学会学術大会において、全国エデュケアハビリテーション研究会とのコラボ企画として「学校に来たのは黒船？助け船？～そもそもPTって、何ができる人？何を担う人？」を実施しました。

今回はその内容を深めたり、アップデートしたりしていくために、学校現場に内外から関わるシンポジストの実践の様子や連携のポイントを、教育委員会に携わるシンポジストからは教育行政に関するトピックスを共有ししてもらいます。昨年度に引き続き、明日からの各地域での実践に、少しでもヒントとして活かしていただけることを、本ワークショップの目的としたいと思います。フロアの皆様からも学校常駐、放課後等デイサービス、保育所等訪問支援事業、教育委員会等、様々な関わり方をしているパネリストに対して質問を募りながら、悩みややり甲斐を共有できるようにします。

ワークショップ⑧ 第13会場（4号館3階43A教室）

企画者 長島 史明（医療法人財団はるたか会）

希望定員：40人

子どもの「暮らし」をつなぐ理学療法 ～地域を舞台に、私たちにできること～

2021年の医療的ケア児支援法の成立以降、子どもたちは医療的ケアを受けながらも、児童発達支援、放課後等デイサービス、学校など多様な場に通うようになり、支援の姿も家庭中心から地域全体へと広がりつつあります。これに伴い、訪問リハ、病院、療育施設、デイ、学校など、私たち理学療法士の関わる場や役割も変化しています。

本ワークショップでは、こうした「生活の場」をつなぐ小児理学療法の役割について、多機関の視点から意見交換を行います。「通所と学校の間で情報共有が難しい」「訪問リハとデイの支援がちぐはぐに感じる」そんな現場での違和感や工夫も、率直に語り合しましょう。

支援の場が多様化する今、子どもや家族にとって本当に必要な支援とは何か。理学療法士として何ができるのか。日々の実践を通じて見えてきた変化を共有し、地域でつながる未来をとともに描きましょう。

企画者 北村 麻衣子（愛知県青い鳥医療療育センター）

希望定員：なし

パラスポーツにおける理学療法士の関わり ～地域でのボッチャ活動を通して～

※話題提供者として当事者様ご家族様の参加予定、ボッチャ体験あり

ボッチャは、重度脳性まひ者もしくは同程度の四肢重度機能障がい者のために考案されたスポーツで、パラリンピックの正式種目です。2016年のリオパラリンピック以降、ボッチャの認知度は向上しています。ボッチャの競技人口は年々増加し、地域では理学療法士や作業療法士、教員など様々な職種の方が選手の支援を行っています。

現在、国内ではインクルーシブスポーツしても注目されており、障がいの有無や年齢に関わらずスポーツを行うことができ、地域でも広く普及してきています。

本ワークショップでは、ボッチャの概要やクラス分けについての説明ならびに私たちが所属する「あいちボッチャ協会」の活動を中心にパラスポーツにおける理学療法士の関わりや地域での取り組みについてお伝えしたいと思います。また、ワークショップの参加者にはボッチャを体験いただき、愛知県で活動する選手と交流し、ボッチャについての理解を深めていただきたいと思います。

ワークショップ 12月21日(日)13:00~14:50

ワークショップ⑩ 第15会場(4号館3階43C教室)

企画者 木元 稔(秋田大学大学院)

希望定員:18人(オブザーバー参加制限なし)

はじめての研究的思考!小児PT×FINERなPECOを作る×ChatGPT!?

本ワークショップは、小児分野でこれから研究に取り組みたい方や、研究計画の立て方を実践的に学びたい方を対象とした初心者向けプログラムです。以下のような方におすすめです。

- 小児分野でこれから研究に取り組みたい
- ポスター発表は経験済みだが、研究の設計は自己流だった
- 研究の第一歩をどう踏み出せばいいか迷っている

そんな皆さんを大歓迎します!

ChatGPT(生成AI)からの鋭い問いかけに対し、ファシリテーターと一緒に考えながら、研究計画をより良いものへとブラッシュアップしていきましょう。

「ご参加にあたって(注意事項)」

本ワークショップは研究初心者を対象としており、事前のお申し込み(第一次応募まで期限まで)が必要です。なお、以下の方は対象外とさせていただきます。

- インパクトファクター付き英文誌に掲載経験のある方
- 主要国内学術誌に論文を掲載されたことがある方
- 大学院で研究を体系的に学んだ方

初学者の学びの場として、あたたかいご理解をお願いいたします。

定員は18名とさせていただきますが、オブザーバー参加はこれ以上の方の参加が可能です。お申し込みは事前の希望テーマと共にお申し込みをお願いします。

1, 参加可否は、参加条件への合致と、テーマごとの人数による。

(最終的には3つ程度に絞り、申込者に提示する)

- a.脳原性障害を持つ児の補装具
- b.神経発達症
- c.脳性麻痺
- d.低出生体重児

2.臨床的な問い

受講生はこれらの「臨床的な問い」に対し、PICOを作成し、FINERを提示する。

(下記も原案の段階)

- a.脳原性障害を持つ児の補装具

「脳原性障害を持つ児に対して、短下肢装具を日常的に使用することは、歩行の安定性を向上させるのだろうか？」

b.神経発達症

「神経発達症を持つ児に対して、集団での運動遊びを取り入れることは、運動協調性の発達を促進するのだろうか？」

c.脳性麻痺

「脳性麻痺児に対して、通常の理学療法に加えて体幹トレーニングを実施することは、座位バランス能力を改善するのだろうか？」

d.低出生体重

「低出生体重で生まれた幼児に対して、早期からの家庭訪問型の運動指導を行うことは、運動発達の遅れを予防するのだろうか？」

3.参加の可否については、申し込み者個々に連絡する。

ワークショップ 12月21日(日)14:00~14:50

ワークショップ⑪ 第6会場(4号館1階41B教室)

企画者 藤田 ひとみ(名古屋市立大学)

希望定員:40人

電動移動機器を使いこなす

※話題提供者として当事者様ご家族様の参加予定

電動移動機器の存在はその有用性から「幼い子どもの電動車いすの練習用」という存在から「発達を保障する道具のひとつ」へ変化を遂げている。国内では2020年に電動移動機器が市販されはじめ、移動経験を積み重ねる機会がより身近になった。一方で購入に係る費用は自己負担となる場合が多く、支援者と利用者には大きな葛藤が生まれている。企画者らは電動移動機器の有用性を科学的に検証するために、従来では対象外とされた知的障害をもつ児の習得プロセスを客観的に記録し、目の前で起きている奇跡を多くの人と共有した。この奇跡は児本人やご家族の皆様はもちろん、保育関係者の反応まで変えるほどの影響力があった。ところで、電動移動機器の対象者は誰?使用目的や期間は?どこで使う?など様々な疑問の答えは持ち合わせているのだろうか。電動移動機器がもたらす影響について参加者と共に意見を交わすと同時に、実際に導入しているお子さんの様子を共有出来ればと企画した。実運用に向けたボトルネックは何だろうか?

ワークショップ⑫ 第7会場(4号館1階41C教室)

企画者 東久保 和希(三重県済生会明和病院なでしこ)

希望定員:40人

僕のFuture ~大学進学の実をかなえるために~

※話題提供者として当事者様ご家族様の参加予定

夢をかなえるために、「わたし」はいろいろな選択をしてきました。

・身体も心も絡み合って、うまく学校へ通えなくなった中学時代。主治医のすすめで支援学校に転校、足の手術も受けることになった。

・その手術後は支援学校に通い、新たな医療機関での理学療法士との出会い

・もう一度、地域の高校への進学を。僕を受け入れてくれる高校はどこだ

・提案される理学療法で目標を大学進学に・「わたし」は東京の大学に行きたい

そんな「わたし」を支えてくれた理学療法士。

術後、中学3年の夏からリハ担当。大学進学(上京し一人暮らし)を長期ゴールとして、必要な運動機能面を本人と意見を出しあいながら、高校卒業までの3年半を逆算し、日々の課題を明確にして運動プログラムを提供した。最終的には、一人暮らしを想定した応用動作訓練も。まだ見ぬ未来の生活をイメージした「わたし」の取り組みと、理学療法士の右往左往、皆さんだったらどう対応しますか?

ワークショップ⑬ 第8会場（4号館1階41F教室）

企画者 株式会社 Loving Look こども訪問看護 ST じん おかざき

希望定員：20人

ぼくたちの未来「聴かせて！お子さん・家族のホンネ！」

※話題提供者として当事者様ご家族様の参加予定(オンライン)

医療やリハビリテーションの現場において、私たち理学療法士は専門職として評価や訓練を行いながら、患者さんであるお子さん・ご家族と日々関わっています。しかし、その関係性の中で、当事者やご家族が理学療法士という職種にどのような期待を抱き、どのような思いや本音を持って関わっているかを、私たちはどれだけ受け止めているのでしょうか。

本ワークショップでは、「理学療法士に対する本音や願い」「実際に関わって感じたこと」など、お子さん・ご家族の声に直接触れることで、参加者が自らの臨床を振り返り、今後の関わり方をより丁寧に見つめ直す機会となることを目指します。

最終的な正解を出す場ではなく、多様な価値観や経験を共有し合う中で、明日からの実践に役立つ“気づき”を持ち帰っていただければと考えています。

ワークショップ⑭ 第12会場（4号館2階42F教室）

企画者 竹田 智之（横浜市教育委員会）

希望定員：30人

エデュケアハビリテーション実践ケーススタディ：子どもの授業参加の方法を考える

インクルーシブ教育システム推進の考え方のもと、小中学校においても多様な状態像の児童生徒が在籍をしている現状があります。いわゆる肢体不自由児に関しても、姿勢保持や移動能力、医療的ケア等、教育的ニーズの多様化が顕著であり、学校現場においては専門職の知見を必要とする場面が多くありますが、実際に専門職を活用するスキームや実態は自治体によって様々です。

本ワークショップでは、実際にパネリストおよび参加者の皆様と、複数の架空のケース情報を基に、授業への参加方法についてアイディアを出し合いながら、学校現場において専門職としてどのような視点をもつことが大切かということについて共有をしたいと思います。

（現在想定中の架空事例→CP児の運動会、DMD児の音楽、上肢欠損児の体育、特に鉄棒や跳び箱、他）

ワークショップ⑮ 第 10 会場（4 号館2 階 42D 教室）

企画者 岩本 健人（北部地域療育センター よつば）

希望定員：40 人

あいち小児リハビリネットワーク登録者の実態調査から小児リハビリテーションの今後の課題を考える

現在、小児の医療・療育は施設から地域への移行と多職種連携という変容の過程にあり、多様な機関で小児理学療法が実施されるようになってきた。日本理学療法士協会は『医学的・社会的背景に即した小児理学療法を提供するためには、その実態を知ることは極めて重要だが、それを十分把握出来ていない』と報告をしている。近年、小児分野において、①多様な働き方や役割の増加 ②多くの病院等での小児分野における経験者・指導者の不足も指摘されている。このため、オンラインでの研修や勉強会の需要は年々高まっており、愛知県においても 2024 年 1 月から、あいち小児リハビリネットワークという取り組みが開始された。しかし、あいち小児リハビリネットワークにおいても登録者のニーズについては把握しきれていない。今回、あいち小児リハビリネットワーク登録者における『小児リハビリテーションの実態とニーズの明確化』を目的として、アンケート調査を実施した。このワークショップでは、あいち小児リハビリネットワーク登録者の業務実態やニーズについて詳細に共有し、『小児リハビリテーションの今後の課題』を学会参加者と一緒に考える、そんなディスカッションの機会にできればと考えている。また現在、各地域で行われている取り組みなども参加者の方々に共有していただければ、様々な他の地域での今後の取り組みにも繋がっていくのではないかと考えている。

ワークショップ⑯ 第 11 会場（4 号館2 階 42E 教室）

企画者 鶴飼 宏和（株式会社ジェネラス 生活介護ことあ）

希望定員：30 人

生活介護事業所で理学療法士ができること～ライフステージを見据えた小児期から成人期への支援を考える～

本ワークショップでは、18 歳以上の方々の生活の様子や課題について知り、この年代(以下、成人期)の方々へ提供できる支援を考えたい。成人期では、「社会との接点作り」、「自立の支援」といった社会参加の実現と同時に「二次障害の進行」に注意を払うことが主な課題として想定される。また家族の介護負担増や学校卒業後の支援状況の変化など、生活支援の環境変化も課題の一つになると考えられる。このような状況にある成人期の方々に生活介護事業所が果たせる役割とリハビリテーション職種ができることについて意見交換したい。

また中は、成人脳性麻痺者の課題の中ではあるが、小児期から見通しのある援助を計画的に実行することが重要である、と述べている。本ワークショップへは、現在小児期に関わっ

ている方々にもご参加頂き、将来に備え計画的に援助するという視点を得る機会としてご活用頂ければ、より意義深い企画になると考えている。

ワークショップ⑪ 第9会場（4号館2階42C教室）

企画者 伊藤 卓也(鈴鹿医療科学大学)

希望定員：40人

教育委員会との連携で進める学校保健活動の可能性

発育段階にある児童を対象として、体力低下対策や傷害予防といった形でも全国的に発展しつつある学校保健分野の理学療法。その活動の始まり方や浸透、拡大の仕方は様々かと思えます。三重県四日市市では活動開始からおよそ2年となりますが、市教育委員会の教育推進課の協力のもとで、活動範囲の拡大や多様な依頼が寄せられています。これは地域全体をカバーする教育委員会ならではのネットワークのおかげであり、理学療法士が学校保健分野に職域を広げる事に効果的に働いていると感じます。

一方で、多種多様な業種が関わる学校保健分野において、理学療法士が果たせる効果を地域に継続的に是認してもらうためには創意工夫が必要と考えます。この度のグループワークでは四日市市教育委員会との関わり方を例に、今後理学療法士の活動はどのように発展する事が可能なのか意見交換の場としたいと思います。

ワークショップ⑱ 第 13 会場（4 号館3 階 43A 教室）

企画者 高橋 恵里（福島県立医科大学）

希望定員：30 人

放課後等ディサービスでの理学療法士による支援

児童発達支援および放課後等ディサービスに勤務する理学療法士が増えている。専門的支援体制加算および専門的支援実施加算が算定可能となったことも、理学療法士の勤務機会増加の後押しとなっている。児童発達支援および放課後等ディサービスでは、多くの場合、医療機関よりも高い頻度で、日常的に対象児に関わることができる。しかし、医療機関のように理学療法士が個別の理学療法の提供のみを業務とすることは難しく、保育や送迎などの他の業務を担う職場も多くある。また、施設特色、運営方針などにより、対象児への関わり方は様々である。

本ワークショップでは、理学療法士の視点や知識の活かし方、他の専門性をもった職員との関係構築、目標設定方法、評価方法、介入方法等についての一例を提示した後、参加者間で意見交換を行う。参加者間の情報交換を通して、翌日からの支援に役立つワークショップとなることを目指す。

ワークショップ⑲ 第 14 会場（4 号館3 階 43B 教室）

企画者 里中 綾子（愛知淑徳大学）

希望定員：50 人

福祉系職場での理学療法士の働き方

小児・障がい者を対象とする理学療法士の活躍の場は医療機関から障害者支援施設、通所介護事業所などの福祉施設へと広がっている。こうした職場では理学療法士が 1 名～数名で配置されることが多く、他職種との連携を模索しながら実践している。こうした環境では、職場内での孤立感や専門性の発揮の難しさ、他職種との役割分担の不明確さなど、多くの不安や葛藤を抱えながら実践を行っている理学療法士が少なくない。本ワークショップでは、福祉系職場に勤務する理学療法士の実情を共有し、①福祉系職場における理学療法士の働き方や課題を可視化する、②少人数配置に伴う悩みや疑問を共有し、孤立の解消を図る、③多職種との連携のあり方や工夫の共有を目的とする。さらに将来的な連携や支援体制のあり方、施設間のつながりづくりをめざす。